

井上結理 個展  
INOUE Yuri solo exhibition



www.kunstarzt.com

## NUKEGARA # 4 I am I

KUNST ARZT では、二年毎、四度目となる、井上結理の個展を開催します。井上結理は、日常生活の中から一場面を抽出し、生きていることについて考察するアーティストです。本展は、ライフワークとして15年間以上継続している、脱ぎ捨てた衣類を俯瞰で撮影した写真の連作「ヌケガラ」を中心にした展示をメインルームで展示し、サブルームでは、作家の身体に付着する細菌や微生物を視覚化してきた試みの新作を展示します。2つの部屋を通して、コロナ禍のタイミングだからこそ、作品が汚染物のように見えたり、生き延びている証のように見えたり、社会の急激な変化により、これまでとは違ったかたちで立ち現れると思われま

(KUNST ARZT 岡本光博)



ヌケガラ

### 経歴

- 1985 京都に生まれる
- 2007 京都精華大学芸術学部造形学科洋画分野 卒業
- 2009 京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程 卒業

### 主な個展

- 2019 ph (KUNST ARZT)
- 2016  $\mu$ mの生命 / Microbes make a "macro" world. (KUNST ARZT/ 京都)
- 2015 またたく (KUNST ARZT)
- 2013 カーテン (画箋堂 3F / 京都)
- 2010 ヌケガラ #2 (立体ギャラリー 射手座 / 京都)
- 2009 MOTHER (石田大成社ホール oIBC / 京都)

### 主なグループ展

- 2019 Artist-in-residence 2019 Janus Kamban'House フェロー 諸島
- 2018 ART RAINBOW PROJECT 2018 (ロストック市美術館 / ドイツ)
- 2015 Face Forward (KUNST ARZT)
- 2011 HOSOMI TO CONTEMPORARY 004 -too contemporary art lab (細見美術館 / 京都)
- 2011 源平屋島現代美術展 東北地震支援プロジェクト (香川)
- 2008 Changwon Asian Art Festival (アジア芸術祭 / 韓国)

### Collection

ロストック市美術館 ドイツ

2021年5月25日(火) から 30日(日)

12:00 から 18:00

会 場 : KUNST ARZT

605-0033 京都東山区三条神宮道北東角 2F

問い合わせ



KUNST ARZT 代表 岡本光博

090-9697-3786

kunstarzt@gmail.com

## 展示コンセプト

この作品は、一日の終わりに今日着ていた服を脱ぎ、写真に収めるという作品です。

服を脱ぐという日常的な行為を、人は無造作に行いそこに意味を問うことはありません。しかし私は、この些細なルーティーンの結果乱雑に脱ぎ捨てられた衣服に対して、まるで脱皮した生き物の抜け殻のようなもの悲しさを覚えるとともに、自身が存在したことを証明する痕跡のような温もりを感じます。

この感傷と痕跡を表現する作品として、脱衣に目を向けた「ヌケガラ」を制作しています。

新型コロナウイルスの影響により、我々は日常に大きな変化を強いられています。そして日常の中にあっても、服を脱ぐという行為は変化しません。記憶である「ヌケガラ」をレンクさせることで、周囲の環境に左右されない、生きるということの本質を本作品では視覚的に実感できると信じています。

## アーティストメント

人間は普段、いろいろな物を無意識に使って生活している。人間が特に意識せずに物を使うことができるのは物に対して知覚的な記憶（経験）を蓄積しているからだと考えられる。

また人間は身体の行動においても無意識に行っていることが多くある。朝起きてから家を出て帰って眠るまで、または眠る事も含めて、人間は全ての行動を自らの意識でコントロールしている訳ではない。

記憶するという人間に備わった機能を巧みに使って、日々の生活に登場する物や行動を記号化して私たちは生活している。おそらく、全てを考えて行動するというのは極度の負担でありその負担を回避して過ごせるように。

写真や絵画あるいは空間的に改めて表現として切り取られ提示されたとき物や行動は記号化から解除される。「そこに人間は何を思っているのか」これが私の興味であり、また制作への動機となっている。

## 青 Faroe Islands

2019

日本（和歌山県太地町）とフェロー諸島で汲み取った海水を使用し その海水で、たき染を行った作品です。世界は海で満ちています。日本もフェロー諸島も海で囲まれており、それぞれの場所で異なる情景を表します。それぞれの地を訪れて、見た海はどれも違って見えました。しかし、それはひとつの海に繋がる、すべてが繋がった水なのです。世界を渡るその水から作成された作品には、共通の意図が浮かび上がらせることができるのではないのでしょうか。そこで今回は、太地町の海を姉妹都市であるフェロー諸島の海に近づけたいという想いを胸にし、汲み取った海水を使用して海の色である「青」を表現しました。

「青」はひとつの色ではなく、多くの色・意味を持っていると思います。

例えば、和歌山県太地町の「青」

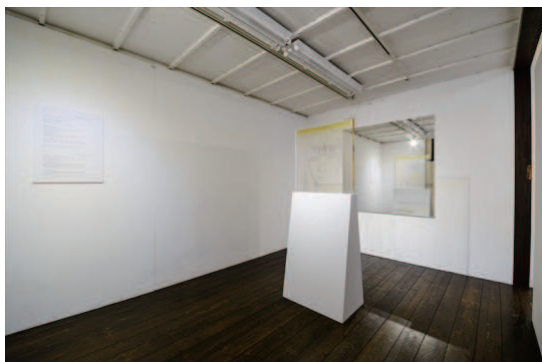
例えば、フェロー諸島の「青」

例えば、海水の「青」

例えば、わたし自身の「青」

どれも違う「青」ですがどれも同じ青です。

「青」を表現するアプローチとして、たき染に着目しました。たき染とは、染料と無水芒硝の入った釜の中に生地をつけて染める、布の染色技法です。芒硝とは、色を定着する成分で塩と似ています。よって塩を多く含む海水でも同じように染めることが出来るのではないかと考え、制作に至りました。フェロー諸島の彫刻家 Janus Kamban のアトリエで滞在制作を行いました。



pH

2019  
KUNST ARZT 京都

自分の色について、表現したい。

鏡や写真を通して写し出される自分自身は、見慣れた自分自身の表面的な色である。

しかし、そのような表面的な色ではなく奥底にある自分自身の本質の色について考えてみたい。

人の3分の2は水で出来ている。

水に反応する溶液を思考していたところ、ある研究者から受けた「pHという水の性質によって色が決まる薬品がある」という指摘を糸口にしてこの作品は動き始めた。